

「もとはこちら」のお話し

No.72 今月のテーマ 子育ては、親育て



講義中の平井謙次先生

正しい自己反省は 不幸を幸福に換える 特効薬

（平井謙次作 日めくり カレンダーより）

北原ゆり筆

それは一年中で一番寒いといわれる、丁度今と同じ頃、二月の初めの事でした。

この日開かれた勉強会は、我が子が精神的な問題を抱え、進学、進路の事で悩んでいるという会員のご両親に対し、平井先生がアドバイスをするという内容の講義となりました。

その子供さんは、時々ご両親と一緒にこの勉強会にも参加しており、自らの問題をはっきりと自覚しているようでした。

当時は確か、まだ中学生であったと思いますが、彼女は自らの問題解決に向け、なんと、野宿をしながら沖縄まで歩いていくという、あるグループに参加する事を決め、数日後にその出発を控えておりました。

しかしそのご両親は、我が子が多様な過酷な旅に出かける事には関係なく、自分達は予定通り以前から予約している観光旅行に出かけるという話でした。

その話を聞いた平井先生は、次のような話をされました。

~~~~~  
良い子を育てるといふ事は、育てる親自身が、良い親にならなければできない事である。

~~~~~  
ここである、良い親とか、良い子という場合の親とか子というのは、狭義の捉え方であって、これは師弟関係においても、また職場の上司と部下などの関係においても同じである。

自分が相手に対し、こうあってほしい、こんな人に育ってほしいと望む姿があるのなら、当然の事ながら、まず自分自身がそのような人にならなければいけない。

自分自身がそういう様な人間になろうと努力し、変化していく中で、相手も自然に変わっていくのである。

何故ならば、人は誰でも置かれたその環境によって、様々に変わっていくものだからである。親というのは子供にとって、最大の影響を及ぼす環境だといって決して過言ではない。その親である自分が今までと全く変わらないで、子供にだけ変わる事を求めというのは、出来ない相談である。



思わぬ方向に育ってしまった子供を見て、子供だけを直そうとする親が多いが、それは間違っている。

親は先ず、我が子をその様な子供に育ててしまった自分のこれまでの考え方や育て方の間違いに、気付くことから始めなければならない。

そして子供に対し、ここから詫び、自分自身の考え方や行動を改め、今までと異なった良い環境、即ち、今までとは違う良い親という環境を与えてこそ、子供は良い方向に育っていくようになる。

但し詫びるという事は、口に出して言葉で「すまなかった」等と言って詫びることではない。

本当のお詫びというのは、自分のこれからの行動を変えるところという事である。

だから、どれ程「すまなかった」と口先で言葉として詫びたり、また平身低頭したりしても、もしも子供に接する実際の行動がそれまでと何一つ変わってこないとすれば、それは本当にすまなかったと思ってはいないという事になる。

もしも本当に心の底からすまないと思っているのであれば、誰でもそれから先の行動は変わるはずである。

子供は親の鏡であり、子供の姿は、現状の親の問題を映し出して見せてくれているのである。

子供自身に問題があるのではなく、もしも問題があるように見えるのであれば、それは間違いなく親の側の問題である。

だから親が変われば、必ず子供も変わっていく。

子供の苦労は親の苦労であり、また子供の喜びは即、親の喜びである。

親はそういう家庭環境を作るように、日々努めなければならぬ。

~~~~~

以上が、平井先生のお話しの概要です。

彼女が参加して沖縄まで歩いていったのは、確か「90 生への行進」だったと思います。そのグループの行進はもっと早くから始まっていたのですが、彼女は和歌山から途中参加したのです。

南国和歌山からの参加とはいえ、季節は真冬の二月です。行進は西へ西へと続きます。

北風吹きつける凍てつく道を重いリュックを背負い、彼女等はひたすらに沖縄目指して歩き続けます。

日が暮ればその場で野宿し、翌日はまだ日も明けやらず暗いうちに起きだして、再び行進が始まります。

一日にどれ位の距離を歩いたのかは知りませんが、時折り彼女からの手紙が届けられました。

歩き始めて間もなく足の裏に沢山の豆ができ、それが幾つも潰れて血がにじみ、ものすごく痛いという事。

痛いけれども、それでも我慢して歩いているという事なぞが綴られておりました。

またある日は、脚全体が脹れて棒のようになってしまっているけれど、それも段々慣れてきているというような手紙も届けられました。

実はこの行進に参加する前年の六月に、修験道の行者が修行の為に歩くという、奈良の吉野から熊野三山に到るまでの大峰山の奥駈け道を、私は彼女と共にしたことがありました。

険しい山道を飛ぶように走っていたその時の彼女の生き生きとした様子などを思い浮かべながら、今はただ黙々

と歩いているだろう彼女の姿を思い描き、無事を祈り続けたものでした。

ところで話を元にもどし、自分を見つめなおし、自分を鍛える為に我が子がこれから難行苦行の旅に出るというのに、方や親の方は、その内心はどうであれ、自分達は物見遊山の旅行に出かけるという事に対し、先生は、「親がそういう事だから、子供が育たない。いや、育たないというよりも、親に問題があるから、問題を抱えた子供ができるのだ」と強い口調で諭されたのでした。

結局その両親が、予定通りにカニを食べる旅行に出かけたのかどうかは、私は知りません。

しかし、問題を抱えている子供のことで、実はその両親はそれまでも色々と随分心を傷め、時には自営業である商売を畳んでまで、彼女のために東奔西走しておりました。そして子供のことで悩みながらも、いつも明るく振舞い、仕事にも精を出して頑張っておりました。

そういう事を知ってなお、平井先生はそこでご両親に向けて、先程のような厳しい言葉を投げかけられたのでした。それは、このご両親ならばこの叱咤激励の言葉をしっかりと受けとめ、そしてより良い方向に梶を切ってゆくだけの力量があると見て取られたからに違いありません。



沖縄へ向かったの行進は、その後何ヶ月かたつて無事に終了し、彼女は一回り遅くなって帰って参りました。

一步一步、地面を踏みしめながら彼女が何を感じ、何を考えたのか、どういう自問自答が繰り返されたのか、そしてまた行く先々で実際にどういう体験をしてきたのか、詳しい事は知りませんが、帰って来た彼女の表情には、やり遂げたという自信があふれておりました。

野宿と全行程・徒歩(一部、乗船もあったはずですが)という辛い旅をやり遂げた彼女は勿論のこと、大切な若い娘をそういう厳しい旅に立たせたこのご両親も、やはり偉かったと思います。

目的があれば、そしてその目的に近づく努力を忘れることなく、たとえ一歩でもいや半歩でも、這ってでも前に進む事ができれば、私達は、いつかは必ず目的の地に到着する事ができるはずです。

私達は誰もが皆、身近な人による魂の磨きあいをしながら生きているのです。

なかでも親子の関係は特別です。

親は子供を育て、子供は親を育てます。

育てあいの為に、親と子は互いに選びあい、親と子という特別な関係となりあって今、生きているのです。

自分が知らず知らずのうちに人に与えているその影響の大きさに気が付けば、誰でも自ずと身が引き締まる筈です。

こどもとは、決して親の所有物ではありません。こどもは親の姿を映す鏡です。そしてまた全ての全ては、自分を映し出す鏡です。



#### 〔ご案内〕

2 月の勉強会は、2 月 9 日午後 7 時からを予定しています。皆様のご参加を、お待ちしております。

次回は、3 月 9 日午後 7 時からを予定しています。

勉強会及び月報についてのお問い合わせは、左記まで。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用 HP

<http://www.motoha-kochira.com>

mail: [data3@motoha-kochira.com](mailto:data3@motoha-kochira.com)

TEL 073・461・6300